

【NPJ通信・連載記事】一水四見・村野謙吉

一水四見: 仏教の認識論 (唯識説) による縁起を説明する喩え。人間が水と見るものを、天人は瑠璃 (宝石) でできた大地、地獄の住人は膿みで充満した河、魚は住处として認識する。同一の客観的対象が、主観の認識能力・機能・立場・利害関係等によって様々に認識されうる。さらに様々な主観と同一の客観対象自体の一切が相互に連動して諸行無常の変化をしている。

近代西欧知の巨大な虚無・和国日本の小さな「まこと」*

村野謙吉

ここ数年間、世界中でさまざまな異様な大事件が連鎖反応のように頻発している。

2019年10月18日、ジョンズ・ホプキンス健康安全保障センター、WEF（世界経済フォーラム）、ビル&メリンダ・ゲイツ財団などが参加してニューヨークでEvent 201開催され、コロナウイルスの世界流行＝パンデミックのシミュレーションが行われた。

その後、コロナ禍が全世界で流行し各国の経済生活に深刻な影響を与え、人々の心身にも深い不安を植え付けた。

現在、軍事的にはイスラエルとパレスチナ（ガザ）、ウクライナとロシア、そしてイラクを挟んでイスラエルとイランが戦闘を継続している。

そして自由文明のアメリカ合衆国と中華人民共和国の間では、壮大な文明観の相違にもとづくがごとき地球規模の対立が複雑の度を増している。

さらに深刻なことは、最近のアメリカ映画「CIVIL WAR (内戦)」で描かれているように、世界の政治と経済を主導している移民国家アメリカ合衆国の統治機構の内部が崩壊しているかのような状況である。

しかし、複雑怪奇な大事件が世界で展開している最中に、今なぜか、私は以前にラジオ放送で紹介された ささやかな逸話を思い出している。

大体こんな内容の話だ。

妻を亡くした四十歳がらみの男性が、残された二人の子供達をある保育園に通わせた。男性はそこに勤務していた二十五歳の保母さんと面識を得、二人は互いに好意を抱くようになり、ついに結婚を決意する。ところが保母さんの両親は大反対である。

しかし娘は両親に切々と訴えた、

「この男性は、二人の子供のためを思って、もっと多くの時間を子供たちと持つために、一流会社を辞めて、給料はずっと少ないが比較的時間の持てる現在の仕事に転職したのです。お父さんが、その男性だとしたら、子供のためにその男性のような決断をすることができますか？」

やがて娘は両親とは別居して件の男性と結婚した。ある日、その男性との間に生まれた一子をつれて娘は両親と再会する。そこで両親は娘の生き方に理解を示し、いまでは孫の成長を喜んでいる、という話である。

とてつもなく悲惨な事件が現在世界で起こっている最中、こんな話とはとるに足らないことかも知れない。

しかし、ささやかな親子間の問題に配慮して小さな家族の幸せを求める人々を真摯に守ることを怠ってきたのが、これまでの世界各国の政治家と官僚だったのではないか。

では、世界各国の政治家と官僚に影響を与えてきた世界的な支配的勢力とは何か。

非西欧世界を植民地化してきた西欧文明の様々な価値観を装う「観念」である。

ヨーロッパ史の18世紀後半から19世紀前半には、J.S. ミル、カーライル、ダーウィン、マルクス、ニーチェ、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、ルソーなど実に多彩な思想家があらわれ、彼らの発表する様々な観念が現代社会に引き継がれてきている。

観念論哲学の本来・ドイツはナチズムという国家社会主義の観念を生み、マルクスは唯物史観という観念を構想し、そのマルクス主義の政治的影響が絶大であるのは歴史の示しているとおりである。

J.S. ミルは「自由論 (*On Liberty*)」(1859)を出版、その「自由の観念」は西欧の知識人に圧倒的な影響を与え、その日本語訳「自由之理」(1872)は、日本の自由民権運動にも多大な影響を与えたと言われる。

ミルの影響は絶大で、大英帝国の知識層に広まった「自由」の「観念」に、「観念」の操作を職業としている知識人は支配されてしまい、それが劣った国民・被支配者を侵略する「自由」にも、自ずから適応されてゆくことには思考が及ばなかったようである。(1)

さらに、ドイツ・ナチズムの悲劇は他のヨーロッパの主要国にも責任があるのだが、ヨーロッパ史には、あたかも“必要な価値観としての悲劇”の「観念」が組み込まれていて、悲劇の後の逸楽と感動に親和性を感じる体質になっているのではないか。

悲劇の最たるものは戦争であるが、「なぜ、欧州では継続的に戦争が起こるのか」(2)

様々な観念を生み出し、それを社会に適応・普及させる特に近代西欧の知識人と言われる人々は、ほんとうに人々のささやかな家庭生活の幸福と世界の平和を願っているのだろうか？

彼らは真理の観念の探究をしているのであって、大衆の生活苦の改善を思考しているのではない、というかもしれない。しかし彼らは、様々な観念を弄び、情念の深いところで世界の悲劇を期待しているのでないのか？

最低の衣食住の満足さえ得られない多数の人々がいる一方、特に18世紀以来、衣食住に深刻な心配のない西欧の大学知識人には、「生の退屈」の問題を深刻に扱う哲学者がいた。

ハイデッガーであるが、さらに彼の「退屈」：(独) *die Langeweile*; (英) *the boredom*」の考察を研究する哲学者も多くいるからハイデッガーが発表する「観念」の影響力は多大なものがあるのだろう。(3)

しかし近代の西欧知識人は生活感のない頭脳で、世界解釈をし、世界設計の本を出版し、歴史の終末を唱え、優生学を考案し、人間観を設計し、「ひと」として為してはならない基本的戒めを蔑ろにして自由と平等のイデオロギーを観念するが、基本的に現世主義の唯物的観念ではないのか。

カントやヘーゲルの時代以降、世界的に知識人とは大学教員が大多数を占め、特に人文科学系の大学教員は各国の司法と教育を支配しているから、そのような知の流れを批判し是正するのは大変なことである。

世間に流布する知の偏向と偽善とを事実にもとづいて批判するのがジャーナリズムであるはずだが、ジャーナリストたちも大方は大学教育の絶大な影響のもとに生み出されているから、彼らによる知識人批判は不徹底になりがちで、特にマスコミに仕え時事問題を論じるジャーナリストらが彼ら自身を徹底批判することは非常に困難なことだろう。

生物としての人間の生理的に避けがたい根本的生命欲は、個の生存を維持する食欲と種の存続を維持する性欲に根差している。

人間の文化的・社会的な欲望は親鸞が端的に指摘するように、名・利・人師、つまり名声欲・所有欲・支配欲であるが、これらを否定すれば、人間の一切の文明的・文化的営みが停止してしまうから、これは正邪・善悪の問題ではない。

しかし、知識人たる者は、自己の知的優越感についての深い反省があるべきではないのか。

庶民のささやかな幸せへの配慮を欠如し、歴史的実態から遊離した支配観念を政府に提言するような知識人がいるとすれば、彼らは権力体制に阿っている虚無の世界に生きている人々ではないのか。(4)

しかし、和国・日本には、大きな悲劇を前提にしない、小さきもの、さりげない家庭生活の中の「もの・こと」(5)に「ま・こと(真実)」を洞察して生きることには充足する特殊な文化がある。

そこで「まことの外に俳諧なし」と悟り、「東の芭蕉・西の鬼貫」と言われた上嶋鬼貫(うえじま・おにつら; 1661-1739)の一句を紹介。



つくづくとおもふ

我しむかし踏みつぶしたる蝸牛哉

句の前に「つくづくとおもふ」という俳句では通常用いない作者の所感のような言葉がある。だからこの句は二句で成り立っている珍しい句作である。

「わたしは、昔あるとき蝸牛を踏みつぶしたことがあったなあ」が表層の意味。「むかし」とあるから、作者の「おもふ・いま」との対比で、この句には時間の経過がある。

「カタツムリ」ではなく「カギユウ」と読むから(おそらく草鞋で)踏み潰した時の、音感と肉感があるのかもしれない。

では「我」を「我し」と表記しているのは、なぜか。

「我しむかし」を「割れむ・かし」(「む」は推量の助動詞、「かし」は助詞で、みずから強く確認する気持ちを表す)と読めば、「きっと割れて(死んで)しまだろう」と確認つつ蝸牛を踏みつぶしてしまったなあ」が深層の意味だろう。

↑(上嶋鬼貫・ウィキペディア)

ここには鬼貫に、無抵抗のなんの罪もない小さな蝸牛といういのちに対する“意味のない”殺意があったのだ。

殺意とは、人間一般が共有している自分以外の生命の殺害意識であるが、そんなことをしてしまう「わたし」である。しかし同時に、そんなささいなことを“つくづくとおもふ”「わたし」でもある。

仏教の無常「観」は同時に生理的に実感される無常「感」でもあるが、それは、死を内包した「いのち」を感じるときに感得されるべきものであり、これが日本的「まこと」の美意識につながるものである、と私は考えている。

無常の「感」にもとづく日本の美意識は、拷問を受けたり戦場などで命がけの体験したから生まれるということではない。それは知識人らの観念的知の賢(さかし)らを超えた愚の自覚でもあり、しかも具体的なささやかないのちの観察から生み出されるものだろう。

日本の美意識とは、理論的善悪の観念を超えた「もの」の「あはれ」にもとづく体感的道義のことである。

一椀の茶に「わたし」が生かされている世界を感じ、カタツムリを踏み潰す「わたし」の殺意を“つくづくとおもふ”日本文化の「あはれ」の美意識には、ひたすら量的拡大を求め、郷土愛から遊離したグローバリスト的観念的世界観はない。

「あはれ」の美意識には、人生における退屈の感覚も、世界に巨大な対立と悲劇を構想する観念もない。

無常なるいのちの世界についてのつぶやきを、もう一人の俳人に聞いてみた。

露の世は露の世ながらさりながら 小林一茶 (1763 -1827) (6)

(2025年7月6日・記；2025/08/20)

* 【NPJ通信・連載記事】一水四見（2025年7月23日）の改訂版。

- (1) Pankaj Mishra: The ruins of empire: Asia's emergence from Western imperialism.; *The Guardian*, 27 July 2012.
Noam Chomsky: Europe and America as Underwriters of the International Order; Delivered at the Institute of European Affairs, 2006.
- (2) 【NPJ通信・連載記事】2023年2月2日.
- (3) Cristian Ciocan, University of Bucharest: Heidegger and the Problem of Boredom; January 2010.
Journal of the British Society for Phenomenology.
- (4) 参考論説：Niall Ferguson: The Treason of the Intellectuals (The FreePress; December 11, 2023)
- (5) ちなみに「もの」は五感（眼・耳・鼻・舌・身）の対象であり「こと」は観念であり、日本文化では「もの」に「あはれ」を認めるから「もの」は単なる物質ではない。仏教の「針供養」も「もの・の・あはれ」の心に由来する → 「やまと言葉の哲学(2008)」(国士舘大学哲学会) PDF[https:// kokushikan.repo.nii](https://kokushikan.repo.nii).
- (6) この一茶の句にはいくつかの英訳があるが、簡潔で余韻を残す英訳を紹介。

The world of dew
Is the world of dew.
and yet,
and yet.

(*The Penguin Book of Japanese Verse*)

本文、引用文、一定の内容などについて、筆者の意図しない誤記や誤解などがあれば、ご指摘を受けて、感謝をもって訂正したい。